

令和4年6月29日

アユ（鮎）放流体験学習

1、鮎の生涯

秋に川の上流（大野川では松岡、戸次付近）で産卵、ふか（卵から生まれる）した小魚は、すぐに海に下り、河口、沿岸部で動物性プランクトンを食べて育ちます。

春になり、海と川の水温が同じになる頃、5～7 cmに育った小魚（稚魚）が大挙して生まれた川へと戻ってきます（遡上と言います）。

上流まで到達した小魚は川の中のモヤコケ等を主食として成長します。夏から秋に成長したアユ（30 cmにも成長する）は晩秋、下流まで下って産卵して、一生を終える一年魚です。

2、アユが生きていくには

- ① 川の水が常に流れてきれいなこと。
- ② 餌となるモヤコケ生育していること。（30 cm前後のゴロタ石が必要）

3、アユの取り方

「友釣り、ころがし釣り」などの竿釣り、「投網、建て網、やな」等で捕獲します。次の年にたくさん捕獲できるように漁期を設定しています。（大野川では6月1日から10月31日です）

4、雄と雌の見分け方

雄と雌の見分け方ですが、写真をご覧ください、尻ひれの形状で見分けます。雌は三角状から後方向へとひれが長くなっています 雄はきれいな三角状が丸くなっています。

5、アユの放流

現在では、川の中流や上流に「セキやダム」が造られてアユの遡上をさまたげています。が各所には魚道が設けられています、高田橋の下にも設置されています。

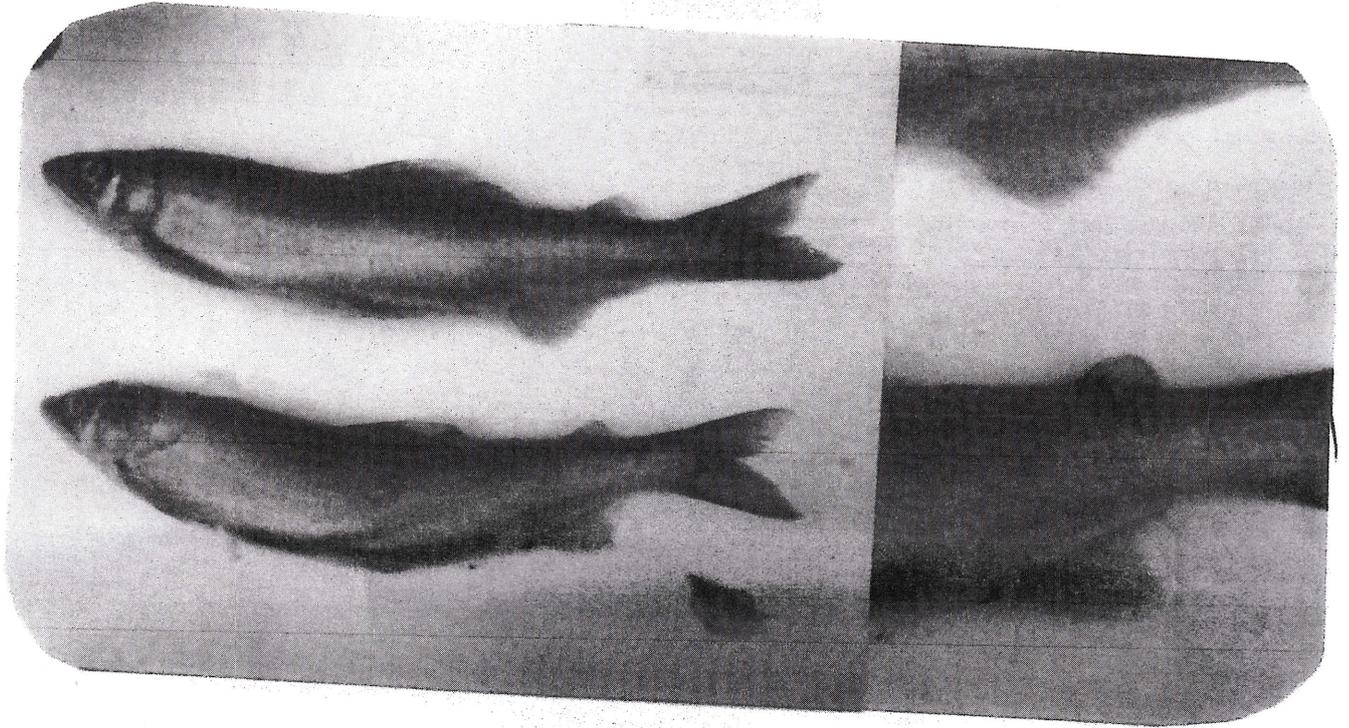
そのため、河口部で遡上前の稚魚を捕獲し、養殖したのち、中、上流部へ大量に放流します。 昨年は3から4月に約40数万匹を放流しました
(3,270kg)

6、 アユの天敵

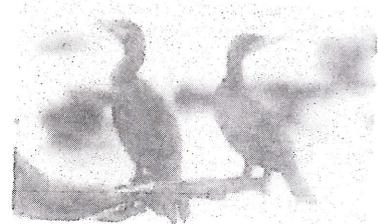
野鳥 (ウ、サギ)・ナマズ・ブラックバス等です。

特にカワウに依る捕食が最大の被害です。1日に500グラム前後食べるので、これを防止するためにロケット花火で脅す、川の兩岸より釣り糸を張って水面に降りられない様にしていましたが、最近ではドローンで追い払ってたりしています。

現在、カワウは大野川河口の九電の高圧線鉄塔に、500羽以上も夜にねぐらとして泊まっています。



Page 1 of 1



© CanStockPhoto.com - csp76357833

令和4年6月29日

うなぎ放流体験学習

1、うなぎの生態

資料をご覧ください、

日本からはるか南のフィリピン近くのマリアナ海域で4月～12月頃に産卵、ふ化して黒潮に乗って北上します、3月～5か月後に3～5cm程度のシラスうなぎとして日本に來ます。日本に來たシラスうなぎは、あらゆる川を上っていきます。

人間に捕まると「養殖うなぎ」として成長させて市場へ出回ります。捕えられなかったシラスは川の上流へと上り、5～10年で成長します、その後川を下り生まれたマリアナ海域に戻り、さんらんします、最近では多少は解明できた様ですが、産卵や場所等は詳しくは解明されていません。

うなぎは川で成長して海で産卵する。 鮭とは真逆です。

2、うなぎの放流と漁獲

30～40年前までは日本の至る所の川にすんでいましたが、川の水質悪化により生育に支障が出てきました。が、大野川は全国でも有数の水質でうなぎの本場として有名になっています。

うなぎ好きな日本人に安定したうなぎを提供するにはシラスうなぎを捕獲して養殖し、市場に提供する、これがシラスウナギの乱獲の一つでもあります。市場に出回っているうなぎは99%は養殖で、1%が天然うなぎです。

うなぎの人工ふ化が出来ない為、シラスうなぎを養殖するしかない、

尚、しらすうなぎの捕獲は河口および海岸付近で行います。

天然うなぎの水揚げは年々減少しています。乱獲も有ります。

世界では①中国5割以上②日本③韓国④台湾

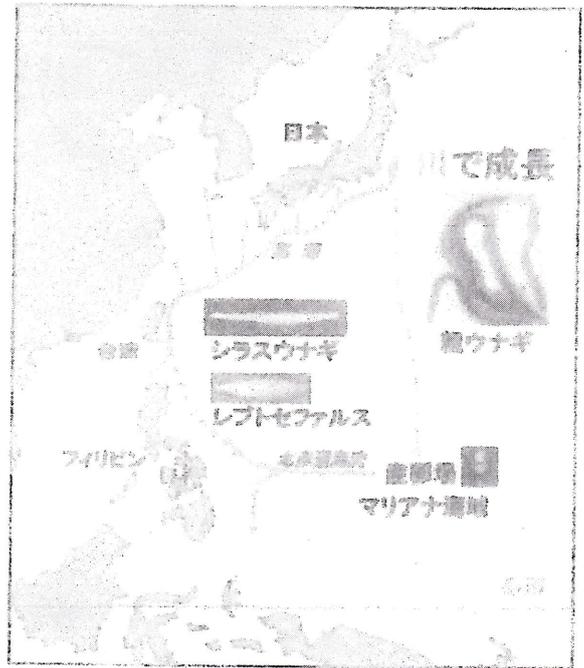
日本うなぎ（天然）①鹿児島県②愛知県③宮崎県④大分県です。

ニホンウナギの生活史

近年、ニホンウナギの稚魚(シラスウナギ)が捕れなくなってきました。ニホンウナギが減少した主な要因としては、生息環境の悪化等が挙げられており、早急にニホンウナギの資源を守るための対策が必要になりました。

ニホンウナギは、日本人には古くから馴染みのある魚ですが、実は謎の多い魚です。赤道近くのマリアナ海域で生まれたニホンウナギの稚魚は、黒潮に乗ってフィリピン沖から台湾や沖縄の沿岸を通過して日本沿岸にやってきます。河口付近で川の水に体を慣らし、10cmくらいになると川を遡って、内陸の水田地域から上流の池や沼まで棲み処を拡大し、5~10年くらいで親になってから川を下って、日本から2,000km以上も離れた産卵場へと向かいます。

しかし、未だその生態はわかっていないことが多く、卵から人の手で育てる養殖の技術開発も実験レベルでは成功しているものの、実用化はまだまだ先になりそうです。



ウナギの稚魚シラスウナギ
(第11管区海上保安本部提供)



参考に

- 1、 放流はいつから始まったか
大野川の放流は昭和25年ころから始まりました。
- 2、 うなぎの雌雄の区別
うなぎの性別は生まれた時から決まるのではなく、環境によって決まる「雌雄同体」 うなぎ養殖では、良い環境では雌になり、成長も早く成長が早い群れには雌が多く、味もよいとされています。
- 3、 うなぎのヌルヌルは
ムコ糖質で夏場に弱りやすい胃や腸の粘膜を保護する役割を持っている夏バテに効果がある。
- 4、 天然うなぎは
天然うなぎは養殖うなぎより価格は高いが 高価=おいしいではない
日本で食べられている養殖うなぎは、ほぼ100%が雄です、うなぎは生後14カ月まではほとんどが雄です。
- 5、 平賀源内
江戸時代、平賀源内はうなぎ屋から夏は、うなぎの旬ではないため、なかなかうなぎが売れなかった。そこで「本日土用丑の日」の看板を挙げたところ聞きなれない看板を見て足を止めて客が入るようになった。尚うなぎの旬は12月です。
平賀源内 江戸時代フリーランス、コピーライターとして色々と事業に手を出した。石綿の鉱山開発、杉田玄白の「解体新書」の挿絵他